同窓生シリーズ 56

関井　隆
（新32回）
昭和60年　東京大学卒業、平成2年同大学院（博士課程）卒業、同Cambridge大学天文学研究所研究員
平成12年　国立天文台助教授

小学校五年生のある日から、私は天文少年になった。その日、私はおもちゃのちっぽけな望遠鏡を空に向けて木星を眺めたのである。その時はそれが木星だとは知らなかったし、ピント合わせさえロクにしなかったので、それはただの、ぼやけた光の円盤であった。だが、その光の円盤が望遠鏡の視野に入って来た瞬間を、私は忘れない。夜空の星々は空に散りばめられた飾りなどではなく、そこに実在する何かであることを実感したその瞬間から、私は天界のとりこになってしまったのであった。

数年後、私は新宿高校に入学し、当然の様に天文部に入った。新宿高校の自由な雰囲気の中、週末には望遠鏡をかついで多摩の山々に登ったこと、夏には館山での合宿へ出かけたことなど、懐かしいことばかりである。スズメバチの巣の下でひと晩を過ごしたこともあった。また、月食観測をしたいのに、平日のことと

て遠征するわけにも行かず、仕方なく高校の屋上から観測したこともある。「何の因果で、大都会の真ん中で天体観測をしなければならないのか」という疑問は、何故だかそれほど湧かなかった。楽しかったからであろう。時にハメを外すわれわれを、厳しくも温かく見守って下さった顧問の豊澤先生は、もう他界されてしまった。天文部も、今はもうなくなってしまったと聞く。大変寂しいことである。

大学へ入って、学科の選択をする二年生の夏頃までには、私の天文熱はある意味では冷めていた。その頃はむしろ、物理をやろうと思っていた。しかし、学科の進学希望を届け出る数日前になって突然、私の気は変わった。やっぱり、天文をやることにしたのである。天文学の勉強を始めるとまた面白くなってしまい、大学院にも進んで博士号も取った。研究職というのは簡単には見つからないのだが、幸いケンブリッジ大学の天文学研究所で採用してくれたので、渡英した。ケンブリッジで一〇年を過ごした後、東京に戻って来たのが五年前のことである。

天文少年が「天文学者」に化けてから随分になるわけだが、天文少年だった頃の様に、ただ星を眺めてその美しさに息を呑んでいるだけでは、研究ではない。物理や数学を駆使して、宇宙や天体の不思議を解き明かすハラハラドキドキが天文学である。だから、天文少年がそのまま歳老いて、天文中年になったわけではないことは書いておかねばならない。

ところで、私が天文少年になった頃、私にはNとWという、二人の天文仲間がいた。その後、Wは一緒に新宿高校へ進んで天文部にも入ったが、Nは高校から別々になってしまい、その後は会うこともほとんどなくなってしまった。ところが、そのNにはMちゃんという妹がいた。二〇数年後、そのMちゃんのお嬢さんが新宿高校に入り、MちゃんがPTAの広報に関わる様になって、私にこの原稿を依頼することになるとは・・・天界に劣らず、人界も驚きに満ちている。

第三回運営委員会報告

（一月一四日三時　保護者控室）

報告事項

・学年主任の先生、各学年近況報告
・厚生部　文化部との合同バス研修旅行の報告
・文化部　七宝焼講習会（二月一日）に向け活動中
・広報部　第一〇七号発行、次号進行中
・指名委員会　活動開始
・学級代表活動報告
・役員活動報告

★編集後記★

〇大変だったけれど、役員の皆様とお知り合いになれて楽しくできました〇楽しく広報に参加させてもらいました。親も一緒に新宿高校と歩んでます〇新校舎の取材もでき、楽しい作業でした。新しい出会いに感謝しています〇委員会活動は、子供や学校のことを知る最大の情報場、楽しかったです〇　前向きでパワー溢れる委員の皆さん。沢山のエネルギーを頂きました。感謝！〇新校舎に一番乗り！我が子の生活も垣間見ることが出来て一石二鳥でした。〇何も解らず、手探りで始めた編集作業でしたが、先生方、生徒の皆さん、そのほか大勢の方の力で、完成しました。ありがとうございました。